

論文審査結果の要旨

報告番号	修 第 1351 号	氏 名	中村 恵美
論文審査担当者	主査 三村 洋美 副査 中村 大介 副査 稲葉 康子		
<p>論文題名：：新生児の体位における横隔膜の動態変化 に関する研究</p> <p>新生児では上下肢屈曲腹臥位（以下 腹臥位）は最も安定した肢位とされるが、乳幼児突然死症候のリスクがあるともいわれている。この研究においては、新生児の横隔膜の動態変化と呼吸状態に及ぼす影響とその有効性を検討することを目的とし、腹臥位での姿勢保持により横隔膜変動は大きくなり、呼吸状態は安定するということが仮説である。先行研究を踏まえて社会的な背景を視野に入れた研究目的が設定されている。</p> <p>研究の方法として、在胎 37～41 週で出生し呼吸障害のない新生児を対象とし、背臥位と腹臥位の 2 つの体位において超音波下で右横隔膜生体内間距離および呼吸数の測定をし、経皮的に酸素飽和度(SpO₂) を測定している。研究目的を明かにするための研究方法を模索している状況あり、今後さらなる超音波下での右横隔膜生体内間距離の測定については議論をする必要性はあるが、現状においては妥当な研究方法であると言える。</p> <p>背臥位時横隔膜変動は中央値 8.7 mm、腹臥位時横隔膜変動 7.1 mmであった。背臥位時呼吸数 70.0 回/分、腹臥位時呼吸は 54.7 回/分、背臥位時 SpO₂ は 98%、腹臥位時 SpO₂ は 97%であった。背臥位時と腹臥位時の間の横隔膜変動と呼吸状態についての評価項目に関して有意な差は認めなかった。仮説を検証することは出来なかったが、対象とした児のうち、2 つの体位ともに安定した覚醒状態でデータが得られた 3 例では、すべての児において横隔膜変動は背臥位時よりも腹臥位時で減少しており、呼吸数も背臥位時よりも腹臥位時で少なかった。しかし SpO₂ は背臥位時よりも腹臥位で増大していた。安定した覚醒状態の児のデータより、伏臥位では、少ない呼吸努力で呼吸の安定が図れている可能性を発見した。導き出した結果より、今後の発展が期待できる研究である。</p> <p>これまでに新生児を対象に体位の違いでの呼吸の有効性を検証する研究はなく、さらなる研究によって新たな知見を導き出すことが可能な研究であるといえる。発表においても工夫をして適切な表現でのプレゼンテーションを行うことができた。</p> <p>上記より、本論文は本学大学院学位論文(修士)審査基準を満たしており、学位論文に値すると判断した。</p>			